

『とらわれないとは握りしめないこと』

地震の後片付け 二階はまだそのまま

「今日までの人生、上出来でございました。」との言葉を残して、自身の人生に区切りをつけられたのが女優の樹木希林さんです。

「私ね、自分の身体は自分のものだと考えていたのだけれども、これは借り物だったのだと思えるようになった。この身体をお借りしているのだと。その中に私という、何かよくわからない性格のものが入っている。

ところが、その借りものを若い頃からわがもの顔で、ずっと使ってきた。少しぞんざいに扱い過ぎてきた。

癌になって、今頃気づいた。ゴメンネと謝ってももう遅い。(中略)

家や土地にしても自分でお金を出して買ったのだから、自分のものだと思っていたけれど、これも間違いだ。土地や家って、地球から借りているものだよ。東京だ、日本だと言うけれども、突き詰めれば地球から借りているものだったと思えた。

そのとき、これがほしい、あれがほしいということがスコーンと無くなった。

私の物と言っても、死ぬときには何一つ持っていけないでしょう。そう考えたら、物欲がすうっと無くなってしまった。

人間は、いつか死ぬというでしょう。でも、私はいつでも、『あっ、ご苦労さん。お借りしていたものをお返しします』と思っているから、すごく楽なのですよね。」

さてさて、私たちお互いの日々の生活の中身はどうでしょうか。

なかなか、樹木希林さんみたいな心境には至りません。

物心共に、自分のものととらわれ、握りしめている手を開くことができなかつたら、日々の生活が辛く、苦しいですよ。

モノでなくとも、思い込みやなぜかやってしまう癖、そのことで自分自身を苦しめてしまうこともあります。

これらが心の中にあふれてしまい、心が整理できなくなることもあります。

今一度、「とらわれない・握りしめない人生とは何か」を仏さまの教えの中に問うてみてはいかがでしょうか。

蓮如上人ゆかりの寺・西光寺

さて、先日の総代会で、傾いた本堂を建て起こし耐震工事で震災に強い本堂に修繕することを決めました。

歴史のあるお寺です。

明治四十一年の寺院明細帳。

御内陣。

向かって右側の絵像は、浄土真宗の宗祖親鸞聖人です。

そして、左側の絵像は八代目御門主の蓮如上人です。

親鸞聖人は平安時代末期から鎌倉時代、蓮如上人は室町時代の方です。

この蓮如上人が浄土真宗のご法義繁盛に力を注がれたことで、浄土真宗は全国的な教団になりました。

そのため、中興の祖として脇壇の御絵像に掲げられているわけです。

何よりも、西光寺は「蓮如上人ゆかりの寺」です。

さて、この蓮如上人、皆さんがよく知っておられる一休禅師、いわゆる一休さんと大変仲が良かったそうです。年齢は一休禅師の方がかなり上になりますが、宗派の違いを越えて互いに交流してそうです。

お二人の間には、微笑ましくもなかなか一筋縄ではいかないエピソードがあります。

たとえば、京都の西本願寺を蓮如さんが建てていた時のこと。

建設用の木材が置かれている場所で一休さんが、木の上に立ち頭に草を置いてニコニコしていたのです。

大工は誰かわからないので、「坊さん、そこは邪魔だからどいてくれ」と言いますが、いっこうに動こうとしません。

困った大工さんは、施工主である蓮如さんに言いつけにいきました。

すると、蓮如さんが「それは一休だろう。お茶を一杯もっていけば退散するよ。」と言ったので、その通りにお茶を持って行きました。

すると、一休さんは「さすが蓮如」と言ってお茶をガブッと飲むと、さっさと引き上げていったそうです。

大工が不思議に思い蓮如さんに聞くと「何のことはない、木の上に人が立って頭に草をのせているから『茶』を一杯くれということだよ」と言われたとのこと。

蓮如上人と一休のやりとり

時は室町時代。七曲がり半に曲がった一本の松の木の前に人だかりができていた。

そこへ蓮如上人が通りかかれる。

「一体、何の騒ぎか」

「これはこれは、蓮如さま。実は、あの一休和尚が『この松を真っすぐに見た者には、金一貫文を与える』と、立て札立てたので、賞金目当てに集まっているのです」

なるほど、ある者は松の木にハシゴをかけ、ある人は寝転がり、またある人は逆立ちしたりと、それぞれに工夫を凝らして松を見ている。

だが、真っすぐに見たという者がいない。

事情を聞かれた上人は、

「また一休のいたずらか。わしは真っすぐに見たから、一貫文をもらってこよう」

と事もなげに言われたので、一同仰天した。

「おい、一休いるか」

気心知れた仲だから、呼びかけも屈託ない。

「あの松の木、真っすぐに見たから一貫文もらいに来たぞ」

出てきた一休さん、

「ああ、蓮如か、おまえはあかん。立て札の裏を見てこい」

と答える。

実は立て札の裏には、『蓮如は除く』と書かれてあったのだ。

戻られた蓮如上人に気づいた人たちが、

「蓮如さま、一体どうやって真っすぐに見られたのですか？」

と身をのり出して尋ねると、蓮如上人はこう答えられた。

「曲がった松を、『なんと曲がった松じゃの一』と見るのが、真っすぐな見方だ。曲がった松を真っすぐな松と見ようとするのは曲がった見方。黒いものは黒。白いものは白と見よ。ありのままに見るのが正しい見方なのだ」

「なるほど！さすがは蓮如さま」

一同、感服したという。

メル友

ある日、蓮如上人のところへ一休さんから長い長いメールが来た。

「あれこれ あれこれ あれこれ あれこれ

あれこれ あれこれ あれこれ あれこれ

あれこれ あれこれ あれこれ あれこれ

あれこれ あれこれ あれこれ あれこれ

あれこれ あれこれ あれこれ あれこれ
……とかく人とは忙しきものなり」と。

さあ、これには蓮如上人も負けてはいられまい。
蓮如上人は一休さんに返事を出した。

「ねてくて ねてくて ねてくて ねてくて
ねてくて ねてくて ねてくて ねてくて
ねてくて ねてくて ねてくて ねてくて
ねてくて ねてくて ねてくて ねてくて
ねてくて ねてくて ねてくて ねてくて
……かくて人は死ぬものなり」と。

よこす一休さんも一休さんなら、返す蓮如上人も蓮如上人である。
お互いにユーモア満点でありながら、仏法の底というものをしっかり押さえている。

私たちは日々なんやかんやとすることに追われています。
あれこれあれこれと、何やらバタバタと過ごしているうちに一年なんてあっという間に過ぎ去っていきます。

ところが振り返ってみたらどうでしょう。

「あれ？結局この一年何だったんだろう？」ということはないでしょうか。

そうやって私たちは、寝て食って寝て食って寝て食って寝て食って、「あれ？結局この一生って何だったんだろう？」と死んでいくのかもしれないよと蓮如上人はおっしゃっているのです。

本願力にあひぬれば むなしくすぐる人ぞなき

食て寝てとは、単に食べて寝るだけではありません。

忙しい世の中で目の前の楽しみや欲望に執着して悪を造り愚痴を言いつつ、過ごしていくことで、そして死んでいくのでは、むなしいことですねとのお二人のやりとりの手紙。

ほとんどひらがなの易しい言葉で見事なまでに人の真実の姿を表された言葉です。

ご開山親鸞聖人は高僧和讃に
本願力にあひぬれば
むなしくすぐる人ぞなき
功德の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし (高僧和讃)

阿弥陀さまのご本願に出あえば
むなしく人生を過ぎるひとはいません。
六字の名号の功德がその身にみちみちて、
煩惱の濁り水をも同化して差別がなくなる。

とおっしゃっていますようにあれしてこれして忙しい世の中で食て寝て「自分自身」を見失い、むなしくさ迷い続けている「この私」だからこそ慈悲のお心で、救わずにおれない、見捨てておけない、ご本願を信じておくれよと阿弥陀さまのほうから今ここで私に働いてくださっているのです。

何があろうとも揺らぐことのない確かな拠り処の阿弥陀さまのご本願を信じてその御恩に朋に感謝のお念仏を申ささせていただきながら日暮をさせていただきます。

本願力に遇いぬれば むなしくすぐる人ぞなき

私たちは誰もが自分の人生を日々精一杯生きています。

そのため「毎日、本当によく頑張っておられますね」と声をかけられると、つい「はい」と笑顔を応えてしまうのですが、その「はい」と答えた後すかさず、「でも死にますよね」と続けられると、残念ながら「確かに…」と顔かざるをえません。

しかも「老少不定」といわれるように、年齢の多少に関わらず必ず死ななければなりませんし、しかもそれがいつなのか予め知ることもできません。

希望としては、まだずっと先のことであってほしいのですが、もしかするとそれは今夜かもしれないのです。

そうすると、「いつその命の終わりを迎えるか分からないのに、もしかすると今夜かもしれないのに、どうして毎日そんなに頑張っているのですか。その日々の頑張りは、いった何のためなのですか」などと問われると、答えに窮してしまうこととなります。

そして、その問いに対する答えを見つけ出せないまましていると、最期は「空しかった」という一言に、すべてが収斂されてしまうこととなります。

これを仏教では「空過」といい、人間にとって最大の不幸だとみなしています。

なぜなら、自分では精一杯生きてきたと思っていたのに、その頑張りはいったい何のためだったのかが分からないままだと、結局最期は「空しい人生だった」という言葉で、すべてが砕け散ってしまうことになるからです。

では、どうすれば空しく終わらない人生を生きることができるのでしょうか。

その答えが「本願力にあいぬれば」ということとなります。

阿弥陀仏はその本願に「念仏せよ。救う」と説いておられます。

「救い」というと、一般に私たちは病気が治ったり、お金がもうかったりするといったような、いわゆる逆境にあるとき、自分の願いがかなうことを救いだと錯覚しています。

また、順境にあるとき、自分の願いがかなうと「幸せ」という言葉を口にしたりします。

つまり、順境・逆境のいずれの境遇にあっても、自分の願いがかなうこと、言い換えると自分の人生が思い通りになることを願ってやまないのが、私達の偽らざる心の内だといえます。

けれども、お釈迦さまは「一切皆苦」と説いておられます。

この「苦」とは、「私の思い通りにならない」ということです。

この世の中は自身を含め私の思い通りにならないことに満ちあふれています。

ところが、私たちは自分の思いがかなうことを幸せとか救いという言葉で未来に期待し、今自分が生きている現実になかなか目を向けようとはしません。

それは、自身のいのちの事実から目を背け、自分の思いを生きようとしているということに他なりません。

人生は、しばしば旅をすることに例えられますが、そうすると気が付けば既に人生という旅の途上に居ることとなりますが、さて私たちは自分のいのちの帰する世界を見出しているのでしょうか。

もし自分の人生の帰する世界を見出せないままに生きているとすれば、それは放浪の旅のような人生ということとなります。

そして、いのちの帰する世界を見いせないまましていると、患うと「死ぬのではないか」とか、うまくいかないことが続くと「先祖の誰か迷っているのではないか」といった不安の影が落ちてきます。

本願とは、そのような私に、「あなたのいのちの帰ってくるのはここだ」と真実の浄土からよびかけてくださる声です。

そのよびかけを確かに聞くことを「本願力にあう」といいます。

この本願念仏の教えにあうものは、煩惱に満ちた自身の力ではなく、本願のはたらきによって、一人

の例外もなく、この迷いのいのちが終わるとき、必ず浄土に生まれて仏とすることができます。

それは、砕け散っていくいのちではなく、成仏という人生最高の形で成就していくいのちを生きることとなります。

だからこそ、本願力に遇うことができれば、その人生を空しくすぎる人はいないといわれるのです。落語は短い話から長い話まであります。

短いのはというと、

『隣の家に囲いができたんだって?』『へー。』……終わりです。

こんなものもあります。

『向こうからお坊さんが一人歩いてくるで』『そう。』

『向こうからお坊さんが二人歩いてくるで』『そうそう。』

『向こうからお坊さんが三百六十五人歩いてくるで』『そうそうそうそう……』

「なぞかけ」とは「なぞなぞ」の変型です。

「AとかけてBと解く。」

「その心は、C。」

一見なんの関係もなさそうなAとBが、

「C」でその共通点を言い当て、「うまい!」となるわけです。

たとえば、

「ウグイスとかけて、お葬式ととく。

その心は、どちらも鳴く鳴く梅に行きます（泣く泣く埋めにいきます）」。

同音異義語の豊かな日本ならではの言葉遊びです。

「お坊さんとかけて朝刊ととく。

その心は、今朝来て今日（経）読む（袈裟着て経読む）!」

袈裟と経は僧侶の必需品です。

けれどもまた、今朝（あさ）と今日（いま）も、僧侶が大切に使うワードです。

朝には紅顔ありて夕べには白骨となる

蓮如上人の「白骨の御文」でも有名な文句です。

「今朝」元気があったとしても、夕方までそのわが命の保証はありません。

世の無常という現実を肝に銘じる仏の教えです。

ならば「今日」という一日を大切にしたいものです。

「今日はどんな一日にしようか」、

「今日はどんな一日にしたいか」と、前向きに自分に問い、わが願いを確認したいものです。

「良い一日にしたい」と願う私達。

ならばそのために何をすべきか。

「……喧嘩はすまい。」

いろいろあるでしょうが、願いという言葉をもつ事によって、人間はその言葉に背中を押され足が前に進むのです。

浄土真宗のお経。

それは阿弥陀さまの物語です。

阿弥陀さまの話とは、阿弥陀さまの願いのお話です。

「私はあらゆる衆生をこんな風にしたい」

その願いの結晶が「南無阿弥陀仏」、これを名号（みょうごう）といいます。

親鸞聖人が生涯「これこそが唯一無二の名宝」と説かれ続けたものです。

「南無阿弥陀仏」と申すお念仏は、仏さまの側からいうと、

「わが名にかけてあなたの命をむなしく終わらせない、

そんな喚び声、名号なのです。

夜が新しい朝を連れてきます。
「今日はどんな一日にしたいか」
「良い一日にしよう」と思いつつ、
お念仏をしながら、
「今日も阿弥陀様は何と願っておられるか」、
「私のためにそんな事を願ってくださるか」、
そのことを聞かせていただきます。

朝刊は明日ではなく今日読みます。
お経も「歳をとってから」でなく今日（いま）です。
無常の人生に待ったなし。
ご縁がととのった時に読みたいものです。

最後に。蓮如さんは、御文を書かれた方としても有名です。
その御文の中で阿弥陀仏の本願を信じることでたすかるのだと書かれていることに対して、一休さんは「これはおかしいじゃないか」と次の句を蓮如さんに送ったのです。

「阿弥陀には まことの慈悲はなかりけり たのお衆生のみぞ助ける」

如来はそんな差別をされるのかという問いです。

もちろん、一休さんは弥陀の本願をよく知ったうえでトンチをしかけます。

さて、蓮如さんはこの問いに対して、「阿弥陀にはへだつる心なけれども 蓋（ふた）ある水に月は宿らじ」つまり、月は地上のどんな水にも月影を写す。しかし、ふたのある水には月はうつらないとの意味です。

また、仏説阿弥陀経をみた一休さん、阿弥陀経には極楽浄土の様子が書かれているのですが、西方の十万億土先に極楽浄土があると説かれていることに対して「極楽は十万億土と説くなれば 足腰立たぬ婆は行けまじ」と問う句を送ります。

対して、蓮如さんは、「極楽は 十万億土と説くなれど 近道すれば南無のひと声」と返し、互いに仏法を正しく理解した者同士の当意即妙のやりとりをしたという逸話があります。

樹木希林さんのお話。「物欲がすうっと 無くなってしまう。」

本願力にあひぬれば

私たちが握りしめている「ものさし」は価値観であり、世間を生きていく上ではなくてはならないものです。

ですから、私たち人間は、それを捨てることは出来ません。

けれども、「ものさし」を手放せない私たちは、自身を飾ったり嘘をついたり四苦八苦するばかりです。

はかることを必要としない「ものさしのいらぬ世界」を「阿弥陀さまの世界・浄土」といいます。浄土に目覚めなさいと、常に阿弥陀さまはよびかけておられます。

「ものさし」を持たずにはいられない。

そうして持つことによって人を傷つけずにはいられない。

そうした私たちの本当の姿は、「ものさしのいらぬ世界」に出遭うことでしか気付けないのです。

上手く「手ばなす」には、まず自分が握りしめている「ものさし」に気づくことではないでしょうか。